

史鑄製鐘梵
船造立日
場工港築



著述同山口

日立造船築港工場

史 鑄 製 鐘 梵



道 円 口 山

序

終戦当時、全く注文のない工場をどうして売れる製品を作つて運営するか、これは工場をあづかるものの、最大のなやみであつた。私はその当時、築港工場の鑄鍛造課長から工務部長になつた時で、自宅通勤も不便であつたため、鶴町寮に泊り込みで、日夜画策し方途を考えておつた。その頃は例の農器具の製作も行きづまつている時であつた。

或る夜、同宿の伊達総務部長、山口円道君と大豆入りのドンブリ飯の夕食後の雑談で、何んとか新製品を考えねば、という話になつた。

私は、海外から兵士の遺霊が送還されてくるのも数多いので、仏具を作つてみたらと考えたが、山口君が梵鐘の話をもち出した。「平和の鐘」は良いな、当時の世相からみて都市はだめだが農村にはいけそうだ、というので、それではそれにしようかと言うことに決まつた。

梵鐘製鑄には極めて慎重に数々の調査と試作をしたが結果的には、非常に成功であり、新円も多く集まつたため会社の経営にも幾分かプラスになつたと思つている。

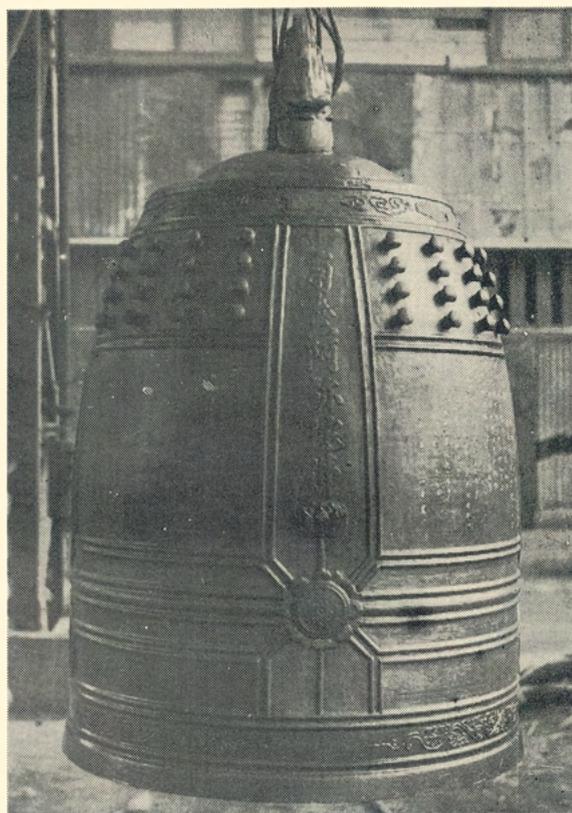
そのいきさつについて、もつと詳しいことを調べて、書き残しておくことは、日立造船の歴史にとつて非常に大切なことと思ひ、桑原顧問と御相談した結果、桑原さんの克明の調査を煩わして、今度のこの本となつた次第であります。

何卒みなさん、一読されて、晩近やかましくいわれている新製品開発の行き方について、今昔、彼我を比べて一つの御参考にされるのも従時ではないと思ふ次第です。

昭和38年5月

常務取締役 岡村正家

日立造船製造
梵鐘第一号
香川県 正蓮寺納



福井県 本覚寺納



中川職長

倉田

曾田係長

塩田

山口円道

森山組長

池田

(昭和二十五年二月二十三日写)

はじめに

平家物語巻頭に “ 祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響あり 盛者必衰の理を顕す ” 云々 と、浄瑠璃曾根崎心中に “ 七つの鐘も六つ鳴りて 後の一つが今生の鐘のひびきの聞きおさめ 鐘もものかは星も又 今宵限りと光るなり ”

昔の人々の生活には、鐘の音と言うものが無くてはならぬものであり、寧ろ生活と一体となっていた。こうした由緒深い梵鐘を、弊所で造り出すべく計画を立てたのは筆者であつた。幸い松本長蔵氏、岡村正家氏の積極的な支持と脇本、曾田両氏の撓まない熱意によりて、幸い製鑄出来得る過程となつたことは、わけても幸いの一つである。

昭和24、5年頃は、漸く製作の好調期に達した折も折、極度の材料値上がりと造船の「ブーム」で愈々梵鐘中止の止むなきに至り、この期に日立を退くべく決意をしていた時、椋居総務部長より、梵鐘製鑄史を作るようにとの命を受けた。誠に有難い御言葉であり、喜んで従事したかつたが、こうした論文製作を予期していたならば、もつと資料を蒐集して置くべきであつたことのみを残念に思う。

ただ多くの鑄造の中、特に有名鐘のみを拾いて、前編となし、脇本、曾田江藤氏の研究論文を後編となし、ひと先ず時間に限りもあるので、その任を果したいが、この計画を立て、今は終焉を告ぐる整理となることは、あまりにも重大な任務であることは言をまたない。もとより浅才菲学であり、古き梵鐘の見聞も乏しく、加うるに、短綆深井を汲むことのでき得ない無知であるのみならず、書中幾多の脱漏誤謬だらけの急造史を思うだけでも漸愧に堪えない。

然し坪井良平氏が、吾が社の大先輩であり、その上考古学上より見たる梵鐘の歴史観は何人と言えども、追隨を許さない立派な好著である。

その上、青木博士の音響研究に於いては、これまた、科学に根拠を置いた

名作論文と言わなければならぬ

然らば、今日吾々に与えられた使命とは一体何物であるか、当然、これ等の総合的研究と、現代的製作の實際を、科学に立脚した分析及び綜合理論を産み出す任務があつた。

然るに、その使命を果す途中、脇本氏の退社となつた。幸い江藤氏の続究が進められたが、その爛熟期を見ずして終焉を告ぐるとは余りにも淋しい限りである。

然し近代に於ける「メーカー」とはなつたが、決して研究の完決を告ぐるものではない。筆者は鋳物界の泰闘楠瀬工学博士とも懇意の中から、坪井青木氏以外の今日の研究題目を是非進着すべく担当を願ひ、40ヶ内外の「データ」をまとめていられるので、いずれ折を見て、これ等の総合研究所を設け、いま一步理想とすべき終極の目的を果し得たい念願である。

昭和26年盛夏

山 口 円 道

目 次

序	常務取締役 岡村正家
はじめに	
第一	梵鐘 応 召 1
第二	梵鐘 鑄造の意義 2
第三	梵鐘 鑄造の動機 3
第四	梵鐘 鑄造の計画 5
第五	梵鐘を語る会 6
第六	梵鐘 鑄造の試作品の完成 8
第七	梵鐘 鑄造の営業方針 11
第八	梵鐘 受注の経過 14
第九	梵鐘の世論調査票について 18
第十	主なる梵鐘 鑄造の経過 21
	大原美術館の時の鐘 21
	岐阜県 清安寺の鐘 22
	石川県 浄真寺の鐘 23
	石川県 専修寺の鐘 25
	大阪府 本照寺の鐘 26
	柳井お大師の鐘 27
	四天王寺の鐘 29
	福井県 本覚寺の鐘 33
編集のことば	桑原秀夫 36
付 録 39

梵鐘製鑄史

第一 梵鐘 応 召

今回第二次世界大戦が起り、大部分の梵鐘が供出されたが、その数は判然しない。とにかく寺は全国で7万とされ、梵鐘の数が、5万5千個（半鐘を除く）平均80貫として、全部供出すれば、約4百万貫で、わが国2カ年の銅産額に相当すると言うのが企画院の計算であつた。

慶長以前の鐘は坪井氏の調査によると約4百個以上であるが、これは全部保存されることになつた。

この供出決定は各府県知事が決定することになつてゐた。2割程度保存することになつても相当数が供出されたことになる。

その保存の標準としては

1. 皇室に関係のある梵鐘（天皇御寄進など）
2. 銘文の有名なるもの
3. 事跡の有名なるもの
4. 各鑄造家の作品中最古のもの
5. 各鑄造家の代表の作となるもの
6. 特に形の優れたもの

となつてゐるが、青木博士は音の優秀なるものを付加してもらいたいとのことであつたが、実現しなかつたそうである。

近畿2府県の供出数は8,060個である。供出された鐘は、関西では広島県安芸郡船越町日本製鋼所、岡山県宇野港外直島製錬所、石原産業および八幡製鉄所などで鑄潰したようである。

その後終戦とともに第1回復員した梵鐘は、京都府33、滋賀37、大阪80であつたが、大阪の分は一応日立築港工場へ荷揚げし、材質試験の穴を

補鎮して返したものである。復員した鐘は材質が悪く従つて音も悪い訳である。この連絡は仏教連合会の主事南谷恵澄師であつた。

因に供出した時の値段は1貫に付3円33銭。終戦後弊社の受注価格は1貫に付2百円以上、昭和26年6月の価格は1貫に付2千5百円となつている。

敗戦後弊社が白紙の立場から、この鑄造に先鞭をつけたことは、結果から見て、確かに新機軸をなしたものと言わなければならぬ。

同業他社が追随して製造に着手したが、不幸にも、大正昭和の遺物を、そのまま傾注したにすぎないことは、鑄物界に何等の進歩を見なかつたものと言ふべきであり、ただ昭和23年後に鑄造の吟味と言ふ世論が、自ら刺激となり青木博士等を煩わして音響「テスト」するとか、新しい着想の必要性を感じて、今日に至るが、偶々非鉄金属の高騰により、26年度は極度に受注率が下つている。

第二 梵鐘鑄造の意義

昭和18年12月8日を期し、金属回収の名により、梵鐘は全国で4万5千個以上にわたる膨大な数が供出せしめられた。

近畿地区の物、香川県三菱鉱業KK直島製錬所、中部地区では、三重県石原製錬所とか、あるいは各鉄工所関係に送られて鑄潰されたものである。

工場に於ても数個のものを鑄潰したと聞いている。

それ等の材料が、砲器、軍艦などに使用されたことは、古の歴史にも、はたまた今回の戦争にも、なま新しい事実を物語っている。

敗戦とともに軍需製品が、産業部門の諸製品に改鑄され、工場においては航空母艦「ほうしよう」「かつらぎ」が解体され、それ等の合金「スクラップ」が梵鐘の一材料として使用されたことは、仏教で言う輪廻を物語るもので

はなかろうか。電子、原子の微粒の働きも、宇宙全般から見れば小さな一現象にすぎない。その間時代の人力により、各々最善の努力を尽すことが人間に与えられた尊い使命であるのに、何故梵鐘鑄造においては、已然として、古き型より、抜き出でられないであろうか。

これこそ機械文明を科学する力の認識不足を訴えるものである。

音響の保存が蓄音機と言う便利なもので保存されたり「フィルム」に録音して保存される如く、言葉は文字で伝えられ、温度は「パイロメーター」により数学的に保存されるのに、金属の火の色と言う問題になると、いまだその光線の保存法が発見されない理由は、一体どこにあるか。

日本刀について、これを日本の美術品として、何故よく切れるか、何故に刀紋が生ずるか、どうして作つたかなどなどについて、東北大学本田光太郎博士、京都大学近藤真澄博士および故宇野伝三博士、九州大学谷村熙博士が研究された結果、日本刀の真価が判然としたことと同様に、梵鐘についても1日も早く、成果を希うことは、一に梵鐘の総合的研究と、現代的製作の實際を期しなければならぬ問題である。

ここに弊社が、梵鐘の来歴、美術品としての価値、仏教的信仰的価値を知るとともに、近代科学に立却した分析、総合的理論の製作に着手した所以こそ、梵鐘鑄造の意義と言わなければならぬ。

第三 梵鐘鑄造の動機

祇園精舎の鐘の声諸行無常の響あり沙羅双樹の花の色盛者必衰の理をあらわす

とは鎌倉人の脳裡に去来した世相の美しくも悲しき描写である。夕霞をついて流れ来る余韻こそはまこと世のなべての人々……さかしきも、おろかなるも、まづしきも、とめるも、おさなきも、おいたるも……の心をうち

限りある世界より、限りなき世界への思慕をそそるものである。

その昔、聖徳太子は

日城大乘相應地

とよろこばれたわが国には、遠き古より、今時の大戦までこの鐘の音色が津々浦々にまで響いていった。然るに何と言う宿業であろうか、にくむべきいさかいの道具の材料として供出を余儀なくされたのである。われわれは口を緘して慟哭するのみであつた。戦雲去つてより愈々平和への春の芽は訪れたが、人々の心は上下を問わず荒み果て、日々の営みは、涯しなき修羅への道をたどりつつあつたのである。心ある者、このきわみなき宿業を悲痛せずにはおられなかつた。

道義地に墮ち行く世相に、あの梵鐘の聖音を懐しく思わずにはおられない折も折、日立造船築港工場も再建の途上にあり、人員整理も割の荒波は、物品の持ち出し、盗難の災厄には上司の苦痛たるや亦計り知れないものがあつた。

他面復興の一として、平和産業の切替は、食器、農機具の製造販売となつた。

丁度鶴町寮に、岡村工務部長、伊達総務部長とともに同居していた折、真の平和復興は宗教的信念の具備をまたなければ望み得ないことを語り合つた。偶々全国寺院の梵鐘4万個が供出されたので、何とか復興でき得ないものかと提案した。

なるほど梵鐘の鑄造は、船の「プロペラ」製法と同一であるからでき得ないことはないと言うことになつた。願れば、戦時中僧侶の動員で40数名の入社もあり、敗戦とともに帰寺されたので、時の所長松本長蔵氏（この頃はまだ築港造船所と言つていた）に戦いに敗れたが、敗れた中に動義はある筈恐らく大会社と言えども各宗本山に動員謝辞の礼言もしていないだろう。

よつて日立造船こそ、是が非でも道義昂揚の一として、京都各宗本山に礼言参拝を企画し、昭和21年4月15日および5月14・5日の3日間自動

車で案内した。

いずれの本山役職員も、その行為に感激するとともに、何とか、梵半鐘を製造して、寺院の七堂伽藍の一を復興してもらいたい切実の言葉であつた。

これこそ、動員僧侶に対する感謝の行為であり、平和復興へのわが社の使命であり、梵半鐘製造の動機であつた。

第四 梵鐘鑄造の計画

昭和21年2月12日愈々梵半鐘製鑄に際し、岡村工務部長脇本氏に同道して京都寺町高橋鐘声堂本店および工場を訪ね製鑄の理論と実際を見学す。特に脇本氏には後日京都法輪寺後藤光村師（戦時中従業員の講話を数回依頼す）を紹介し梵鐘に関し種々指導を受けしむ。同寺はかつて青木博士が「オーディオメーター」の音響測定実験を研究をされし場所である。したがって色々と製作に関しての資料を得、愈々本格的な研究に着手しはじめた。

筆者は当時各寮の舎監長を仰せつけられ、食糧難の時でもあり、代用食事支給のため、特に酵素菌の利用および最低原料でその栄養を如何に摂取すべきか、所謂酵素菌の研究に着手していた折、偶々、朝鮮青年連盟による寺田寮横領の問題とか、戦時中不良工員炭坑派遣の者など帰郷に際し、当時の責任者に対する恐喝（お礼参り）の問題とか、俘虜裁判に対する責任者として出頭するとか、他面西萩寮事務所への青年連盟による暴行事件に悩まされつつ、計画の一步一步に着手していたので、意の如く進捗しなかつたが、すでに製作方法も納得し得たので1個試作品として製作に着手した。

時に岡村工務部長より、とにかく注文をとるようにとのことで、考えて見れば無理な話で、いまだ1個もでき得ない時から、筆者は親近の愛知県雲谷寺へ出張し、何とか注文を呉れと頼んで見たが、時は新円封鎖の折であり、また経験のない場所に、簡単には注文を呉れなかつた。とにかく近々試作品

もできるから、その節是非たのみたいと依頼して帰えつた。

然し何とか注文をとらなければ、研究費のみの消費では会社に対し申訳もないので再度、同寺を訪問して説得に努めたが、1万円の封鎖金が可能ならば、話が進行するとのことで、住職と1里余りの半田市勸業銀行へ参つて、説明をしたが、仲々意の如く支払いの運びとならなかつた。

5月28日第1回の試作品鑄造の手運びとなつたが、その間高橋鐘声堂の援助を得て漸く出来上がつた。

丁度6月1日が空襲による殉職者1周年となるので、四天王寺管長田村大僧正を初め一山の僧衆を招き懇なる慰霊祭を工場内において挙行した折に撞初式の式典をなし、殉職者への御供養となした。この鐘は昭和22年12月奈良県九品寺へ売却したが、昭和23年奈良県郡山町字洞泉寺町大信寺へ交換されて現存す。

この鐘は口径の厚さ1寸8分であつて、普通標準より8貫勿重いため、音響は堅くて小さいが初期打力音に雑音はない。

この間調刻家池田鵬旭氏を招き梵鐘に関する新しき構想などの指導を受けた氏は日立「ミシン」の「デザイン」を担当されておつた。

第五 梵鐘を語る会

梵半鐘製法も理解でき得たので、愈々宣伝に着手せんと6月7日梵鐘を語る会を粉浜寮で催した。

題意

- | | | |
|----------------|------------------------|------|
| 1. 宗教的梵鐘の意義 | 比叡山專修院院長
大谷大学教授 | 山口光円 |
| 2. 梵鐘変遷と考察 | G H Q史蹟顧問
元日立校島総務部長 | 坪井良平 |
| 3. 音響学上より見たる条件 | 京都工芸大学
理工学博士 | 青木一郎 |

4. 美術上より観たる梵鐘 比叡山専修院教授 中山 玄 雄
5. 従来の製作法とその苦心 京都高橋 鐘 声 堂 高 橋 才 三
6. 梵鐘と寺院の動向 中 外 日 報 社 福 見 涙 草

最後に新作梵鐘の構想を語る。

会社側出席者

松本所長、岡村工務部長、高瀬庶務課長、山中課長、曾田、脇本、筆者
この座談会で、概念的な知識を得、特に音響に関しては、青木博士の熱心なる図書貸与の便宜を与えられ、科学的に研究することになった。

かかる会合が一般新聞並びに中外日報などに報道せらるるや6月25日、香川県綾歌郡加茂村正蓮寺より正式の注文を受けたのである。この時こそ何と例えようのない喜びを感じた。特に物資不足の折でもあり、精麦など原価で交換支払いをすることになり、更に1割引の恩典を与えた。

時の社会状況を付記するために、あえてこの一記を挿入せん。7月15・16日と該寺へ事務連絡および物資豊富なる四国へ食料品購入のために出張した翌年該寺総代に対する投書から、精麦統制違反にかかり、筆者は会社当事者として四国丸亀警察署に初めて留置された。先方の総代初め5百戸の檀家より痛く同情され、毎食驚くような差し入れをしてもらって2日間で帰阪した。ところがこの書類が大阪検事局廻しとなり、会社の辯護士を煩わしその対策にあたつたが、事務的な解釈であつたので、該寺関係の四国出身辯護士あるいは検事等にも先方より種々話し合いがあり、一切中河内郡枚岡町小山芳良辯護士(元検事)に依頼することになった。更に書類は現住滋賀県の関係から長浜市に移され、筆者寺院住職の名誉職の関係から尠らず迷惑を感じ、改めて大阪検事局に廻送を願いて出頭した。係官から調書をとられ、その折筆者の行為はことの善悪は判断しかねるが、精麦統制違反にはかかる、何分の回答をするとのことで不起訴となり、この間6カ月実に人知れず苦難の道を歩き良き人生勉強を受けた。

話をもとにかえして、9月4日正蓮寺住職外数名西萩寮に宿泊して5日鑄込式を挙行了。この式典も、法式の中には無いので、筆者独特の式法を案出した。特に比叡山より山本堯俊師を招きて読経を願つた。

面白いことには、お祝いとあつて先方から鯛とかするめ、酒、お餅などを持ちこまれ、些か苦慮したが、新しい式典として、とにかく正蓮寺代表者も心よく了解して呉れた。

第六 梵鐘鑄造の試作品の完成

香川県綾歌郡加茂村正蓮寺、梵鐘も愈々完成す。

模 様	龍頭は坪井氏の設計
音響に関しては	青木博士の指導
口 径	2尺6寸1分
鐘身の高さ	3尺3寸9分
龍頭の高さ	8寸7分
撞座の高さ	9寸3分
口 厚	2寸5分
材 料	純銅87，純錫13，夾雑物なし
振動数	157
唸 り	3秒に1回
重 量	190貫「普通型150貫」

9月13日試作品梵鐘研究会を再度工場において開催した。

当日の出席者

青木博士 山口光円 中山玄雄 高橋才三

工場側より

松本所長 岡村部長 脇本 曾田 筆者

まず現場において試作品を見学す。

製作担当者脇本氏より試作品の構想概要を説明された。

普通の鐘より鐘身の寸法が1.4短い、すなわち宇治平等院型の優雅な形を模し、線は平和象徴の線を出し、龍頭、撞座、上帯雲飛文、下帯唐草文は坪井氏の作を依頼した。これは鎌倉年代からとつたものであると言う。この鐘によつて音響の基準もできたので、愈々自信を持つて製作に着手する旨を述べ、特に問題たる地金の配合と肉厚によりて振動数の高低を知り得たと満足の意を現わし、なお青木先生の御指示の肉厚より多少厚すぎた観があつたと述べ、各先生より御批判をと結ぶ。

青木博士は

音色においては非常に「クラシカル」であつて奈良朝時代のものと良く似ている。同時代のものは音が澄んでいて、余韻が長いのが特徴であると申され、音色正調、唸りは3秒に1回、振動数は156または157であつて、妙心寺の黄鐘調よりは少し高いが、工場において新しい製法であるだけに、近代科学の新紀元を造りだしたものと批判された。

山口光円師は

先回において鐘の意義を述べ、いまその音響を聞いて喜んでいる。欲を言えば、浄土宗、真宗のごとき浄土教の宗旨は、^聲にしても「テン」と言い、禪宗などでは「テン」と鳴るのを喜ぶものであつて、いま正蓮寺が真宗でありこの浄土教の音を聞くことができるかと思うと、嘸かし喜ばれるものと思う。音と教学との関係を申されて賞辞を述べられた。

松本、岡村氏等は

前項の梵鐘製作動機を述べられ、各宗本山訪問の折諸大徳の讃辞を蒙り、諸先生の御指導を俟つて、更に科学に根拠を置いて精進したい挨拶をされた。

中山玄雄師は

日本雅楽12律の笛を持つてこられ、平調より低い調子であると述べ、四天王寺引導鐘は2月15日涅槃会から21日の聖霊会の間、楽人が譜を合せ

に来た記事が、徒然草にあると述べ、奈良朝時代の妙心寺の鐘は恐らく、帰化人により作られたものである。今日妙心寺の付近に浄土院と言う寺に帰化人の作った「うづまさ」の鐘があるが、これは沓越調に等しいと述べられ、更に音律の説明があつた。筆者は司会の席にありながら途中他の用件で席をはずしてこの以後の記事がとれずに終つたので、いま論文を書くにあたり、まことに残念に思つている。

9月24日正蓮寺初鐘式であるので、伊達総務部長、脇本氏および筆者と3名列席し、伊達氏は次の如き祝辞を代読された。

祝 辞

維時昭和21年9月24日中秋彼岸の佳辰を卜し当山正蓮寺入鐘式を挙行せらるるにあたりこの盛典に参列の榮を謝す。願れば去る7月10日弊造船所において受注の榮を受け爾来あるいは梵鐘權威の名士を招きあるいは鑄造技術に創意を凝し日夜研鑽に努め選ぶるに最優秀資材を以てし沐浴齋戒身魂を傾け遂に近代科学の粹を蒐めたる国宝的製品の完成を見たるは誠に欣快に堪えざる処なり、この鐘型は平和日本並びに宗教日本建設のため奈良朝時代の逸品を模し特に平和象徴の線を出し余韻嫋々たる雅楽の平調を現わすものなり、いまや道義地に落ち憂士心を等しくするの時当にこの一杵妙音の響こそ散しては人生無尽の声をなし能く衆生をして迷夢より覚醒せしむるものと信ず一言嘸辞を述べ祝辞とす。

昭和21年9月24日

日立造船株式会社築港造船所

所長 松 本 長 蔵

第七 梵鐘鑄造の営業方針

敗戦後の社会状態は、錫および銅などの非鉄金属は統制物資であつたため高橋鐘声堂としては、意の如く宣伝して注文を取ることはでき得なかつた。さりとて、日立が果して普通の梵鐘を作り得るかどうか、甚だ疑問に思つていたが、設備においては梵鐘界一流の高橋と言えども、到底争うべき余地もなく、あまつさえ、相当量の資材を各造船所より取りよせれば、数百個の梵鐘は製造可能と見たので、当社に対して共同製作を希望し、営業部門は高橋に一任してほしいと申込んで来たので、岡村工務部長は断固として反対意見を称え、伊達総務部長、高瀬庶務課長と良く良く協議し最後の決定案を松本所長に一任したが、不幸か幸いか、とにかく高橋よりの注文は、1貫に付2百50円の2割引で引受くるべく決定した。なお高橋よりは口径2尺2寸(平均)の梵鐘を200本迄は引受け、小さい半鐘の如きは京都高橋で鑄造しようと言うことになつた。

この具体的相談会は昭和21年9月30日高橋才三氏と西萩寮において協議したものである。

高橋より第1回注文として5本を申込み、第1期迄として40本を注文しようと言うことになつた。

さて日立としては1カ月10本完成のため、高橋より梵鐘熟練工3人と、日立より3人担当すれば可能と言うことになつた。所謂双方交換指導して優秀品を生産することになつた。勿論生産品は工場渡して、輸送は高橋自体で負担することになつた。

乳1個1円、撞座1個10円より20円、龍頭は別にし、陽鑄文字は1字5円と決定した。

然し日立自体で営業する場合は、貫250円と陽鑄文字1字20円、陰刻文字1字3円を請求することになつた。その当時の純利益金は1個に付金5千円内外となり、然も封鎖の折から高橋および日立自体の注文者には現金に

て支払いを請い、現金支払者には特点として1割引とした。

宣伝方策としては宗教新聞の中外日報を利用し広告および宣伝文を福見涙草氏を通して依頼したものである。氏は筆者と戦時中よりの知己の関係もあり、特別常に便宜を与えて呉れたことは、幸いの一つであつた。

また9月13日、梵鐘を語る会を催した折は、海運記者を通して、地方版の宣伝広告を依頼したが、造船所で鐘を造ることが面白いと言うので、各新聞が喜んで発表して呉れたものである。

9月15日の朝日新聞には、写真入りの全国版で発表されたことは、確かに宣伝効果があつたものと信ず。

爾來注文引合いの書類が日に数通余りと、直接参観者などで、事務多忙を極めたが、特に参観者が田舎の住職と老人であつたため異風景を生じたが、中でも1組の客が満足するまで質問があるので平均3時間もとられる始末で事務員の悲鳴も飛び出したものである。

1町村に1個の鐘が行くと、必ずその付近から2.3カ所より注文が呉ると言う現象を現わしたので努めて、初鐘式に出席したものである。

岐阜県、滋賀県方面では態々大阪まで注文しなくとも、筆者が滋賀県柏原に毎週帰寺するため、その折を俟つて注文問い合わせの来客が多い時には7組もこられて、せつかくの日曜も休まる暇もなく、悲鳴の喜びを感じたものである。

ところが戦前の梵鐘業者もポツポツと復興し初め、あまつさえ新期に鑄物業者が計画し初めた。例えば、高松市の工業学校とか、あるいは京都の三和梵鐘、弊社もその一つであるが、相当数の業者となり、昭和23年頃には各所の営業員が直接寺院を訪れ、あるいは有力なる総代および世話方を戸別訪問して、それ等の寄付額を「コミッション」する勧誘方も出初めたのであつた。

昭和22、3年頃が注文殺到時で、弊社の最高製鑄は1カ月に27本であり、更に完成予定期日が遅延し、各々謝罪状を出したものである。

各社とも相当乱造し初めたので、時には余韻の少いもの、あるいは砲金製のものまで出初めた。

各所の初鐘式に参列した折、付近地の梵鐘を見学するに、実に不体裁極まるものも出初めたので、特に「梵鐘の話」として印刷物を出し、住職責任者に浄財による新鑄の梵鐘に関しては十分なる研究を要する旨の警告書を出したものである。

梵鐘の話は付録参照

弊社としても、各府県の注文取りをする営業員もなく、従つて新鑄寺院の初鐘式には、努めて部課長の責任者を派し、出席寺院に挨拶なり、依頼をする宣伝法とか、また他寺院新鑄への紹介者には全額の1割を出すかわら、中外日報および関西地区への新聞広告をなすよう特に桜居総務部長の命もあり、約1カ年間実施し相当の成果を上げたものである。

梵鐘の営業利益金は

昭和21年	1 3 8, 9 1 0
昭和22年	1, 9 9 5, 6 9 0
昭和23年	1, 4 6 9, 5 8 0
昭和24年	1, 1 0 6, 5 4 0
昭和25年	4 0 7, 0 8 0
計	5, 1 1 7, 8 0 0

上記は合金鑄物の平均として算出された数字で梵鐘自体においては、更に純利益を得ていた訳である（現場製作数より会計損益個数42個不足？）

所謂梵鐘においては薄利多売主義であり、なお受注者には極めて親切を旨とし、製品に対し何処までも責任を以つ日立大会社の使命に基づいての営業方針であつた。

第八 梵鐘受注の経過

戦後4カ年の鋳物製品の一つとして、梵鐘の鋳造こそ、日本全体として一つの大きな動きであつたことはいまさら言うまでもない。

1個の梵鐘に対し数10戸数あるいは数百戸の全国津々浦々の檀信徒が、何処の鋳造所で優秀品を製作し得るか、その期待と喜びは、初鐘式の式典に参列して初めて知り得ることである。

彼等にとっては、一生一度の仏縁のことであり、他檀徒の者までが浄財を寄進し、老若男女等しく瑞気の涙を出して喜んで呉れたものである。

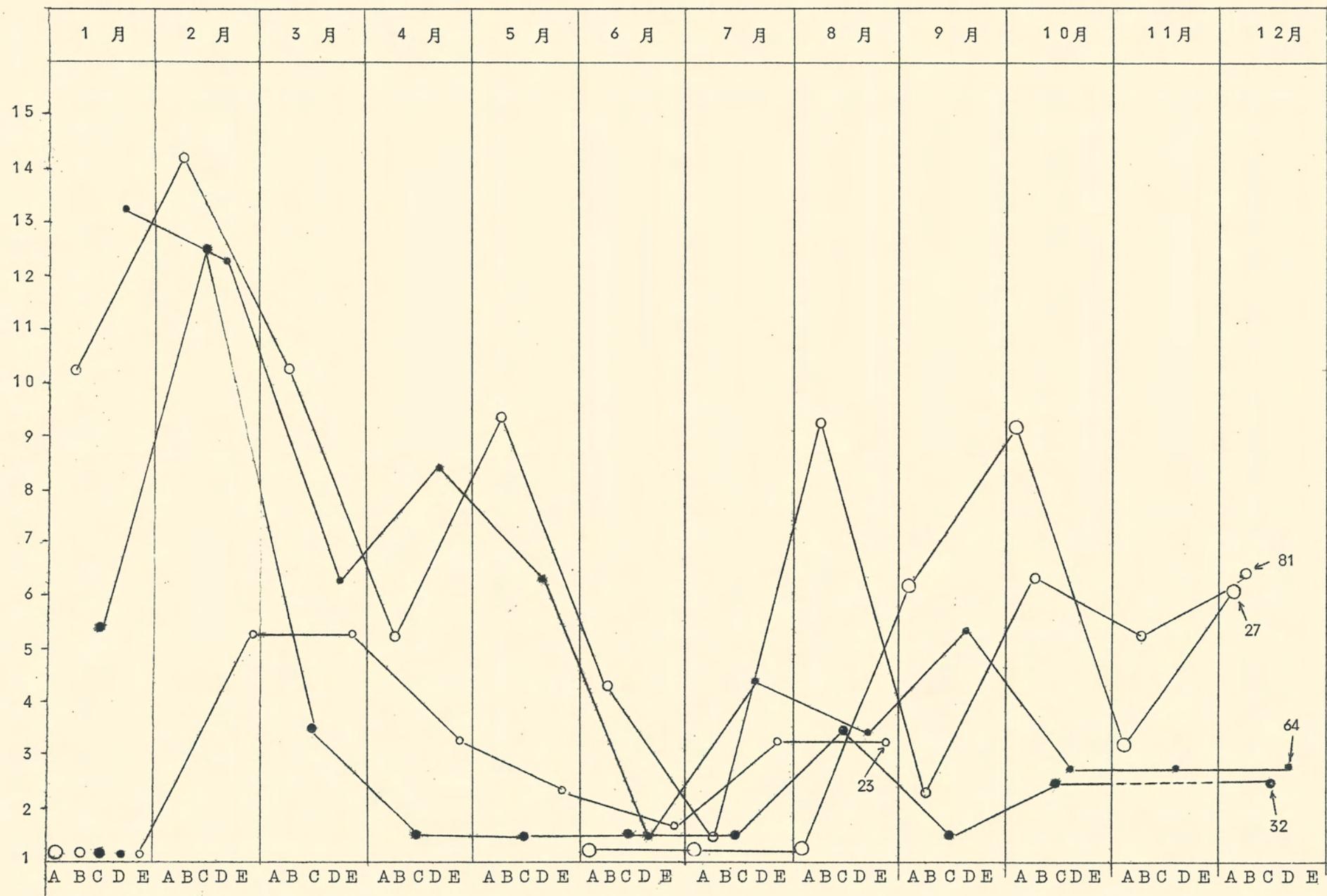
それが朝な夕なに撞かれ、あるいは時の知らせ、また非常時に撞かれ、彼等の生活に即した器物となり、寺にとりてはいまままでの縁故を一層深くせしむる一石二鳥の宗教用具であるだけに、寄進の中でも特に喜んで寄捨され、初鐘の式典の如きは、誠に盛大を極むるお祭り行事である。

およそ機械製品を製作するにも、如斯多くの人々に喜んで頂き、更に永遠にのこる美術工芸品であることを考うる時、どうしても良心的製作たらしめざるを得ないのであります。

その意味において、初鐘の式典には各課ともに交代して、式典に参列したものである。昭和23年末には、既に競争的な宣伝戦となつたために、止むなく、努めて筆者が代表して出席したものである。特に式典後、梵鐘についての講演とか、田舎の青少年の宗教を通じての座談会に出席し、偶々坪井氏が梵鐘における権威者であり、日立造船の宣伝と最高に行く梵鐘の「メーカー」としての自負を語つたものである。

他面「メーカー」としては、富山県老子、滋賀県黄地、京都高橋鐘声堂、同三和梵鐘鋳造所こそ弊社に勝る数を送り出しているものと思う。

弊社としては、昭和21年6月より25年6月の4カ年に半鐘共に495個を製造した。



日立直接受注梵鐘

A	B	C	D	E
昭和二十一年	昭和二十二年	昭和二十三年	昭和二十四年	昭和二十五年
二七本	八一本	三二本	六四本	二三本

計二二七本

付 録 添 付

古より梵鐘鑄造所において1カ年に4本または5本製造すれば、1年の生計を営むものと聞いていたが、時代の進化は恐しいものである。恐らく終戦後全国の製造高は1万に近いであろう。

坪井氏は慶長末年までの梵鐘を詳しく研究されたその中に、製作年代を表にされたが、その年に数多く製造した時は確かに豊年の年であり、世の中の疲弊していた時は、製造されていないことこそ梵鐘を通して、確かに文化史の一端を表明されていたが、終戦後においても、まず農村関係が最も多く漁村、町と順位を定むることができるであろう。

別紙図表の如く、1、2、3月が最も多く、6、7、8月が非常に少ない受注の特徴を示している。

それは何としても田舎中心であり、米の収穫を見て注文さるる場合が多い訳である。9、10月は麦の収穫に影響しているものと思う。

よつて上記期間外は努めて漁村、町中心に宣伝したものである。

梵半鐘鑄造数	4 9 5 個		
日立直接受注	2 7 3 個	梵鐘	2 2 7 個
		半鐘	4 6 個
		由鑄	1 0 個
高橋鐘声堂	2 1 2 個		
総 胚 数	2 8 6, 9 1 0. 9 Kg		
総 貫 匁 数	7 6, 5 0 9 貫		
1 個平均胚数	5 8 3 Kg		
1 個平均貫匁数	1 5 6 貫		

第九 梵鐘の世論調査票について

梵半鐘の製鑄史を作るように、桜居総務部長より命があつたので、営業本意に終始し終つた今日、資料も乏しくいまさら慚愧に堪えない。接角鑄造したものが、果してどのように影響しているか、また何宗旨が多かつたか、梵鐘再鑄の結果寺院の世論関係はどうであつたかと言うようなことをも付記して見たいまでに、次のごときしらべを返信料付で発送した。

謹啓 寒冷の候となりました尊寺益々御清祥の御事と御喜び申し上げます。陳者過日来梵半鐘の御用命を拝して以来益々御声援を賜りておりましたが今度弊社製品四天王寺盤抄調鐘が除夜の鐘として零時14分より7分間放送されることとなりました。(終戦後製作されし最初の放送鐘)御納寺願つた鐘と同音の正律を喜んで聞いて戴けるものと信じます。就いては皆々様の御声援を感謝し因縁深き御寺院を永遠に記念致したく「梵鐘製鑄史」を編纂致すこととなりました故甚だ御多忙中とは存じますが、別紙御記入を願ひ科学と宗教を結ぶ新しい昭和の歴史の一頁を飾りたく存じます。右御賢察の上何卒至急御返信御配慮を煩わしたくこの段伏而御願ひ申し上げます。

昭和25年12月25日

大阪市大正区船町15

日立造船築港工場総務部営業課

180通に対し僅か76通のみであつた。調査票に基づき、その反響を見たい。

1. 宗派別

作製年度	真宗	浄土宗	臨濟宗	曹洞宗	真言宗	天台宗	年度製作数	調率
昭和21年	3				1	1	5	2.1割
22 "	21	2	3	1	2	1	30	4.7 "
23 "	8	1		4	4	1	18	5.6 "
24 "	10			4			14	2.2 "
25 "	5	1		1	1	1	9	3.5 "
計	47	4	3	10	8	4		

真宗寺院が最も多いが寺院数も多い。信仰的にも篤信者多く所謂庶民仏教の特徴を現わす。初鐘式などの場合実に熱心であり自分のことのようにして奉仕している点是他宗に見られない。

檀信徒数

檀徒の多い程寺院経営は容易である。梵鐘募金の如くも百家以内の寄進率で募金すれば、予算の3倍、4倍となる。したがって各所の修繕とか復旧に相当貢献している。概して最初は檀徒数の多い寺院が注文し、後になるにしたがつてその逆である。よつて資材高騰とか環境は益々悪くなり、再鑄の率も少くなる。少数の檀徒でも篤信者の大口寄贈があれば容易であるが、弊社の中でも僅か数カ寺あるのみである。しかし初鐘式などの場合、全檀徒寄進の寺院はきわめて盛会であり1寄進の寺では嫉妬的な所まで見受けられ淋しく感じた所もあつた。信徒は責任も軽く、したがつて数のみ

で判断すべきではない。

しかし高槻市常見寺の如きは、新しい法人制度の理想とする所であるがこれは住職に教養と手腕と徳がなければでき得ない。弊社鑄造の分では山口県柳井金剛寺とか佐賀県田代町安生寺(尼僧)位である。

3. 余韻の有無

150貫以上であれば余韻は2分内外であるが実測に知識なくしたがって公平を欠く憂いがある。距離は1里内外が多く特に本覚寺の如く2里20町まで響く実測地図まで送付して呉れた処もあるが、実際に実測する熱意がない。百貫～2百貫までは1里内外は確実であるしかし風の関係湿度の関係で多少影響するものである。

4. 前鐘と再鐘の比較

調によればいずれも音響構想ともに勝るもの多く僅か3カ寺前鐘の方が良いと言う調もあつたが良く調べて見ると鐘身の薄い雑音の入つた徳川期以後の鐘を喜ぶ風もあり、かつ住職自体に鐘の知識もなく、初めから昔のものが良い先入感もありて判然しかねる。また調の送付なき所にはあるいはもつと前鐘に劣る処があるかも知れないが、およそ誠意と熱のない所が多い。ただし朝夕、時の鐘として撞く寺院はその意義を認め返送するも、用件のみで撞く寺院では鐘楼堂付近は雑草を生やし寺務に対する不熱心さを示すものではなからうか。こうしたことまでが今日寺院の退嬰的人生落伍の所以を物語るものではないか。

5. 町村と寺院との関係

檀徒の多い所は宗教的行事以外にも集会などの公益に用いる場合があるが少い処では住職自身、寺外に活躍している所もあれば、あるいは小規模の教化事業を営むなどの社会的活動をなしている。住持は概ね知識階級の人が多くしたがって社会的尊敬を受け、町と寺との関係は田舎程深いものがある。

6. 撞木の適否

この欄の記入が少い、概ね棕櫚の使用率が多いが小さすぎる感がある。これは寄付者の関係もあつてむづかしい問題である。

7. 仲介せられし日立内外氏名

概ね中外日報などで広告によるもの多く、また船会社の昭和油槽船筒井社長とか、三光汽船の吉田藤解重役その他実業家などの記名もあり、梵鐘による測り知れざる宣伝も認むべきである。

8. 再鑄以後における檀信徒との関係

梵鐘が縁となり、益々親密を増し、寺院経営には少からず良き結果を上げられていることはともどもに喜ぶべき現象である。

寺院の復興はまず梵鐘からと叫んで来た弊社の方針が、現実に実を結んでいることを思う時、時機を得た方策であつたことを付言する。

第十 主なる梵鐘鑄造の経過

大原美術館の時の鐘

昭和24年7月初旬、本社より取引先倉敷レーヨン工場の大原社長より日立造船において、美術館の鐘を鑄造致したい旨に付、当時価格貫千円の問い合わせおよび模様などに付、種々打合せがあつた。筆者も倉敷本社を訪れたが、前大原敬堂社長記念のために鑄造されるものであるが、現社長大原総一郎氏は、特に音楽的才能を有し、過日、岡山県下3カ寺程梵鐘音響「テスト」に見学せられし折、弊社海蔵寺百貫の音が、特別優秀とのことで、日立を選ばれた理由であつた。

また「デザイン」は倉敷と特別の関係ある棟方志功氏に依頼され、氏は現代版画の大家と聞きおよんでいる。表紙図の如く新しい構想である。これを西野田高等工業学校の清水勲氏に石膏を弊社において依頼した。

口径2尺3寸、百貫を金拾万円で引受け、彫刻石膏を金十万円で契約したその間営業の東中氏が交渉した。

鑄込式には、大原社長の来場もなく、8月18日社長来場されて、音響「テスト」をされた。

特に満足のようにあつた。

目下、岡山県倉敷、大原美術館に、時の鐘として響いている。

清安寺の鐘

岐阜県土岐郡泉町曹洞宗清安寺は、文部省督学官、奈良高等師範学校長の坂井喚三師が前住職であり、当時後住問題ですべて総代の村井暎史氏が交渉された。

当寺は新聞広告によりはるばる来場されたので、弊社の製作を説明した総代の村井氏は熱心なる信仰家であり、また実業家であつた。当地も陶器景気で相当裕福に観じられた。したがつて鐘楼堂も新築し、鐘も理想的なものを製鑄したい意志であつた。

弊社営業部面も普通型の中に、特に出資可能の寺院には、特異型を宣伝して受注しなければならぬので、当時は135貫が最も優秀な音響を発していたので、口径2尺5寸、重量135貫を進めたものである。

銘においては、前住職坂井師は筆者の恩師でもあり、特に曹洞宗管長の浄書を進言した。しかし該寺の立場では意の如く依頼しかねる旨であつたので筆者は即座に引き受けた。

実は高階管長は名古屋覚王山日邊寺の住職であり、幸い執事長とも懇意であつたので引受けたものである。

長谷川副長も曹洞宗関係に知己もあり、総本山理事長西沢師（親戚関係）を紹介願つた。

2月2日より東京都豊島区池袋3の157西沢師宅を訪問し更に曹洞宗宗務所を紹介されて訪問した。幸い高階管長は鶴見総持寺に滞在中のこのことを確かめ、折から財務部長が滋賀県人の関係もあり、2月4日総持寺を

訪れた。多忙のため梵鐘浄書の件は承知したがしばらく猶予をほしいとのことであつたが、急を用するため浄書のできるまで滞在する旨を申し上げたら、翌日完成して頂いた。

2月9日清安寺総代来場には、その顛末を話した処、その努力に対し非常な感激を持つて帰宅された。勿論出張費は該寺院より請求した。

3月20日、刻字等完成し、23日に発送した。

4月10、初鐘式のために筆者が出席した。幸い該地方は曹洞宗寺院が多く、中には恩師も来場されて、特に宣伝方に努めた。

口 径 2 尺 5 寸

重 量 1 3 5 貫

袈裟褌正面 南無釈迦弁尼如来

裏面 山号 清安寺

池の間四句の偈（銘文の項に記す）

浄真寺の鐘

昭和24年9月21日は石川県羽咋郡柏崎村明円寺松扇哲雄師の紹介により、大谷大学教授金剛行善師宅、羽咋郡志賀浦村町浄真寺を訪問す。

師は一応梵鐘に関し研究を終り、特に石川県は信仰地帯であり、何とかして異つた優秀な鐘を作りたいと申され、一度出張して土地などを検分してもらいたいとのことで、同県長光寺初鐘式に出張の折に立寄つた。

正式に受注する場合は、何と言つても一応訪問して、鐘楼堂の大きさ、4本柱の距離寸法の $\frac{1}{4}$ が口径であるとか、高低の場所あるいは町とか、山村とかを検して調製すべきが理想であると思う。その場所に依つて多少硬軟の材質を用うべきである。

師は銘において特徴を持つていた。

すなわち聖徳太子の法華経義疎の1句または親鸞上人の教行信証の1句その他を臨書で陽鑄方を依頼され、これが弊社の臨書の初めである。

それまでは、住職とか、地方の有名人とか、会社に依頼の折は、大阪市

大正区三軒家松田幸一氏（書道先生）に依頼し、陽鍔原型彫刻は同町橋本龍男氏に2百本余りを依頼した。

臨書は四天王寺出口執事長（現管長）に紹介を頂き大阪市阿倍野区万代町田中塊堂氏に依頼した。氏は関西書道会の審査員である。10月6日訪問し、不在のために8日再度訪問し、その意を得た。

10月14日京都大谷大学図書館を訪問し、教行信証を特に藤島学生課長の氏名で借用し、直に臨書を願った。確かに新しい心組であり、寺院関係では営業的宣伝価値となつた。所謂弊社の独創として、参観者等に感銘を与えたものである。

かつて高橋鐘声堂が、安価の滋賀県黄地佐平と（材料を多量買入）日立の科学的技術設備のために客を流すと歎声の言葉を聞いたものである。

池の間の模様は倉敷美術館の棟方志功氏の彫刻を希望され、大原社長の了解を得るために再度訪問して後日漸く了解を得て入れこんだ。仲々寺と棟方氏との交渉を尋ねられ即答を入れなかつたものである。

この型は、日立特型より、鐘身2寸高く、曾田哲郎氏の図面であるが、約20本を出している。

口 径	2 尺 6 寸
重 量	1 5 0 貫
サイクル	1 3 9
唸	1 0 秒に 8 回
全持続	2 分 1 0 秒
高 音	8 秒
銘 袈裟襷正面	名号
	裏面 能登国金剛山浄真寺
	左 世間虚仮唯仏是真
	右 昭和己丑黄鐘廿八日

因に世論調査の折次記書面が参り付記す。

倉敷「レーヨン」社長大原総一郎氏、棟方志功画伯、日立造船築港工場山口氏各位の御懇情によつて棟方面伯筆の天人画を彫刻できましたことについては一同感激しております。25年9月20日棟方面伯来院見事なでき栄えに満悦され天人画ならびに鐘銘（聖徳太子並びに親鸞上人筆蹟）などを自ら拓本し寺印を捺させ26年の国展に出品すると申され歓談数刻再訪を約して帰省されました。画伯の製作態度に深い宗教的なものが沁み出てうれしくまた大原社長さんの深甚無量の御芳情と伝えられ日立社の御高配などを併せ憶うときこの梵鐘がで上がるまでに奇しき因縁とあたたかい人のまことの和集とを限りなく思い出されて有難く感じております。

昭和25年極月念8日 浄真寺 金剛行詮

専修寺の鐘

石川県羽咋郡野路大谷派専修寺の鐘は、松扇哲雄師の紹介で、昭和24年11月16日訪問した。師は地方学者であり徳者であつた。

今日の如く「メーカー」が増して来ると新注寺院の方で迷うとのことであつた。

付近の金森梵鐘研究所より折入つて依頼もあり、特別に調製方を依頼されたので、特に藤原博士に図面を依頼し、肉厚を青木博士に依頼する旨を申し上げて帰つた。

口径2尺6寸の新型を依頼したので、以後この型を日立型にしたい予定の下に新調したものである。

今日まで坪井良平氏の模様も確かに経験を得た人の作であり、日立型として宣伝して来たが、その時の大家の批判を聞いて見ると、鐘全般に対する調和がなければならぬ説もあり、またその時代の権威者が網羅されてこそ時代の特徴と言わなければならぬので、あえて口径2尺6寸、150貫型の日立製となつた。

12月12日同寺新任職来場され、特に材質を吟味して、少し厚目に製作されたい注意もあり、よつて予定価格より値増しを願つた。3割高。

1月19日田中塊堂氏を訪問して臨書を願つたものである。

3月中旬、特別貨車3日間で送り届け、当に輸送料が9千円であつた。

4月2日初鐘式が挙行されたので筆者が参列した。

この鐘は藤原博士の図面、肉厚青木博士で規定通り150貫が3貫のみ重く153貫であつて、希望通りのものであり、実にその細密の図案に敬服した。「サイクル」も129で国宝妙心寺の鐘と同一であつたので、また先方の喜び言語に絶するものがあつた。

口 径	2 尺 6 寸
重 量	1 5 3 貫
サイクル	1 2 9
全 持 続	2 分 2 0 秒
高 音	1 2 秒
唸	なし

銘は袈裟襟正面名号 裏面常盤山専修寺

左 世間虚仮唯仏是真

右 正覚大音響流十方

本 照 寺 の 鐘

大阪府三島郡富田町別格別院本照寺の鐘は一名本山の鐘と言う。住職は連技泉尾尊正師と言つて末寺120カ寺を有する大寺にして、富田別院で有名である。

昭和25年2月5日三島寮を訪問し、当寺総代吉川氏来寮、同道本照寺を訪問し住職と面談す。当地因光寺の梵鐘はきわめて好評を得、特に桜島厚生課長安藤義鑑師および上田寮監の紹介もあり、是非とも日立において鑄造方を依頼された。

鐘楼堂を見学し、口径3尺、250貫を理想とする旨を申し、特別依頼の件もあつたので、設計を藤原博士、肉厚図面を青木博士に依頼した。2月24日住職および吉川総代工場見学に来場の通知もあり、駅まで出迎へ

申上げた。3月15日正式注文となり、前渡金5万円納入せり、銘文は住職祖母および蓮如上人の句を田中塊堂氏に臨書を願ひ、池の間は菊花御文章と桐花御紋章を前鐘に随つて入れた。彫刻は、京都吉川常雄氏に依頼した。4月27日鑄込式となり住職外2名来寺、会社側より赤松工場長および筆者が参列した。5月6日初鐘式となり、特に京都より青木藤原両博士および曾田筆者と出席し盛会をきわめた。当日感謝状の授与もあり会社としては口径3尺型の新型となる。

数多く梵半鐘を製作するも、いまだ残額金5万円支払未納寺院は、今寺1院である。御曹子の結婚式に膨大な費用を使い、これに原因するとは一考を要す問題である。

口 径 3 尺
重 量 2 4 4 貫
サイクル 黄鐘調

感謝状として

貴所夙ニ篤敬三宝ノ浄念深く今般梵鐘再鐘ニアタリ卓越セル技術ヲ以テ神秘ノ名鐘黄鐘調ノ完成ヲ見タルハ全ク平素精進丹精ノ賜ニシテ誠ニ感謝ニ堪ヘザル処ナリ仍ツテ聊カ記念品ヲ贈呈シ感謝ノ意ヲ表ス

昭和25年5月6日

別格別院 本 照 寺

柳井お大師の鐘（金剛寺）

昭和24年11月21日四天王寺黄鐘調三和梵鐘鑄込式の折、青木博士より、山口県柳井金剛寺大梵鐘の依頼を受けている旨を承り（3百貫）特に大梵鐘のこと、もし失敗などの場合は小会社においては再鑄困難と思われる点もあるので、日立なれば絶対大丈夫と思うから、もし山口県方面へ出張の折は立寄つて頂きたい旨であつた。

丁度山陰、山陽方面へ受注の件もあつたので12月5日、柳井町お大師つりがね奉讃会事務所藤川昇氏を訪れた。

高瀬営業課長の故郷でもあり、折入つて受注方に斡旋の労を煩わしたくも、社用のため来所なく、止むなく単独で訪れ、一応日立の特徴を申し上げ会長平田氏を訪れた。

この奉讃会は風柳会と称し、当寺56才の小学校同窓会員が中心母体となつて、宗教的文化的一大事業として、他面町発展の一助として組織された。その発願の動機は、朝夕不断に聞えた「大師さんの鐘が聞かれないのは実に淋しい」の一事につきる。

当寺は真言宗に属し、住職は山本恒道師である。毎月の縁日には、他郡より相当数の参拝のある参詣寺である。一応代表者揃つて工場見学の上、注文決定することになつた。

翌年1月24日、来阪の報道に接するも来所なく、翌25日三和梵鐘において早稲田大学教授川原博士を招き、磁歪現象研究会が催された。すなわち梵鐘撞木を電気仕掛けで撞く作用および音響の振動と言う問題であつた。

丁度青木博士から電話があり、柳井の客が来校されたが、邂逅するか否かと問い合せがあり、幸い三和梵鐘工場と弊社とを比較するのをもまた意義あることと思つて三和梵鐘において会見した。

翌26日一行6名来場され、予め青木博士の御意見も聴取されたので決定的な注文挨拶に来られた訳である。

しかるに参詣寺の大寺でもあり、昭和の名鐘たらじむるべく、一応青木博士と筆者に土地検分をなし、大きさを決定して欲しいとの旨であつた。

2月8日青木博士に同道し、9日高瀬課長と落合い、雨天の中金剛寺に向つた。その間奉讃会会長および住職より新鐘楼堂の位置の問題で議論百出、寺の総代と、風柳会の対立問題で決定不可能となり、われわれ一行の検分を以つて決定を俟つと言うことになり、こと面倒なことになつた。

寺には信徒多数が集まり、断じて元の鐘楼堂の位置に再建方を希望し、風柳会は百年の大計を建て高地に決定し、将来競輪なり、大遊園地を建設

し、他府県からの客はかならず町を通過させてともに発展すべく計画であつた。

見学終りて平田会長宅に集まり、青木博士は鐘中心に判断し、元の位置で差支えない旨であつたので、高瀬課長も同意し決定した。折から集まる総代世話方は、一同涙を出して喜んでいた現状を見て、実に熱意のある金剛寺であり、将来の発展を願つたものである。

しかし鐘の大きさについては、3百貫の大鐘には自信なく百70貫なれば、すでに試験済とのことで170貫に決定した。「デザイン」は藤原博士、臨書は大阪市大西祐蔵氏(書道家)に依頼し、空海上人の自躰を臨書した。

4月11日鑄込式となり、風柳会一行7名来阪し特に用件を達するに便利な西萩寮に宿泊希望もあり、12日鑄込式を挙行した。

なお鐘楼堂は新築のため藤原博士が計画し、瓦まで設計された。今日までの鐘楼堂は伽藍本位で、鐘中心でなかつたが、今回は鐘中心としての鐘楼堂であり、平安様式で無駄を排し安価で新建築様式である。

5月7日初鐘式であつたので6日藤原、青木博士に同道し出席したが、柳井の町をあげての大盛況であつた。

この鐘こそ鐘を中心とした、しかも新様式で正に昭和の名鐘の一つである。

口 径 2尺7寸

重 量 170貫 凶面彫刻料金4万円請求す

四天王寺の鐘

鐘屋さんに四天王寺の鐘程有名であり、宣伝価値のある鐘はない。昭和23年の暮、愈々引導鐘が再鑄される噂を高橋鐘声堂に聞いた。

早速四天王寺に伺つて見ても、何等具体的に進んでいない旨で、がっかりして帰つた。

昭和24年の初め頃もまた京都へ出張した折、四天王寺の鐘ができる噂

を耳にした。この時は日立造船が最も有力視されている旨であつたが、筆者は夢のように話であつた。

4月15日 四天王寺へ参り、吉田庶務部長に尋ねて見たら、春にでも造ることをめようかと思つている位の話であつたので、その節には是非御願ひしたい旨を述べた。

4月下旬、京都へ出張の折、愈々四天王寺が引導鐘を造ることになつたと言うので、高橋才三氏とは共同製作をしようと、道端話もしたことである筆者も四天王寺の鐘においては相当の自信を持つていたので高橋と共同製作を取り、円満なる結びをつけて置きたいと考えていたが、5月1日高橋が日立に立寄りし際、何等の話合いがなかつたが、翌日四天王寺に伺つた処、昨日高橋才三氏が見積りと青写真を提出して行つた旨、なお他社も数カ所出しているから、日立も出したらどうだと言うので、いささか躊躇したが早速提出した。爾来高橋とは共同受注の意なく、日立単独で進むことにした。偶々、上司の意を伺つた処、是非とも受注するようにとのことで愈々本腰を入れて手を尽した。

四天王寺の話では京都某製造所では、百万円寄贈してもよいから、注文をとりたいたのこと、日立においては如何と質問され、直にでき難い旨を述べた。若し日立が釣鐘専門店であつたら、あるいは出すかもしれないが船が専門のために到底でき得ないと思つたからである。

さりとて、こと技術研究のことなら、あるいは研究費として出るかも知れないが、一応上司と相談の上御返答を申し上げる旨を述べ、早速桜居総務部長に報告し、諸経費50万以内なら引き受けても良いとのことで、5月2日見積書を提出した。

5月20日四天王寺においては、すでに梵鐘委員会なるものができ、委員には京都大学西村秀雄工学博士、京都工芸大学青木一郎理学博士、同藤原義一工学博士、美術館長望月信成、雅亮会小野撰龍、総代白川朋吉氏等であつた。この席上、百万円寄贈の問題は、不可能なる旨を述べた。引導

鐘の「サイクル」決定までは何個でもでき得るか。これは可能を申し上げ更に新聞社招待委員会費用などを負担するかの問題は可能の旨を申し上げ委員会協議の結果、日立と三和とが決定し前者は盤抄1220、後者は黄鐘1090と決定し、5月20日青木、藤原博士を訪問、挨拶をなし6月4日委員会7名を工場見学に招き、粉浜寮において正式挨拶をなす。

7月20日、愈々凶面もできたので、大阪各新聞社および委員会を四天王寺に招き、会社の宣伝を兼ね、正式受注発表となつた。長谷川副長と筆者が出席し、次の如き質問を受けた。

1. 決定的「サイクル」の梵鐘でき得るや

科学的製造をしているので完全可能なり

1. 梵鐘は信仰的なものであつて、共産党などの「ストライキ」をなしている場所で造ることは如何

弊社においてははまだ「ストライキ」なく、梵鐘製造者は熟練工であり思想健全なる職人などでメ繩を張り精進している旨を答える。

1. 完成後は除夜の鐘として放送される旨

1. 「デザイン」は藤原博士

1. 肉厚設計は青木博士

その質疑応答があつて、いずれも満足して解散した。いまは亡き四天王寺田村貫主も病弱をおして出席、挨拶があつた。

翌朝各新聞に一部掲載されたものである。

9月には藤原博士の「デザイン」が完成する予定であつたが遅れて10月は京都法然院に藤原博士および彫刻の吉川氏の籠城製作に敬意を表した

しかし黄鐘調のみで、盤抄調は本年にはでき得ない旨を承り、これには驚愕して、早速四天王寺出口執事長に連絡をとり、両鐘ともに初鐘式を挙行して頂かなければ宣伝価値なしと抗議を申込み歎願したものである。結果藤原博士に「デザイン」促進方を依頼したが、どうしてもでき得ない旨につき残念ながら弊社試作品(四天王寺第1回)を以つて共同初鐘式を挙

行すべく申込んだ。他面起工式として12月11日を決定した。

11月27日京都三和梵鐘において、鑄込式を盛大裡に行ない、桜居総務部長に随伴して出席した。中外日報の福見氏が司会で理研ニュース映画を取り入れ、宣伝豪華をきわめ、夜は新聞社および来賓を島原料理店に案内して祝賀会を催した。

12月11日起工式については京都において先手を打たれたので京都より以上の催しと宣伝を計画し、特に桜居部長に予算10万円を計上した。すなわち四天王寺の雅亮会の舞楽および正式雅児を出し、更に読売ニュース映画には、梵鐘のできるまでの工程を撮影して貰い夜は工場において祝賀会を催し豪華を極めた。別紙「プログラム」の如し。

12月21日初鐘式が挙行され、北引導鐘は工費400万円で竣工し、正面両側に黄鐘、盤抄鐘を吊し、雅楽正調後に田村大僧正により撞初が行なわれ、盛会をきわめ、会社よりは桜居部長、曾田、筆者が参列した。盤抄調の鐘は、いずれ南引導鐘の鐘楼堂が完成してから挙行する旨を断固として反対しかかる撞初式にしたものである。「ニュース」映画は25日後に上映され、三和の分は広告本位のために上映されなかつた点は大成功であつた。

除夜の鐘放送は申込みが遅れたために25年度には取消しとなり、26年度に行なわれ、大阪、新大阪には除夜の鐘を日立造船で製作をしたことが大成功であつたと宣伝されていた。

よつて正式の盤抄調「デザイン」は6月完成したので7月22日に鑄込式をなし、青木、藤原博士および四天王寺より高士御出席されて内々に終る。7月26日両博士来場され検音の結果255貫「サイクル」155であり、駒の爪を調製して221貫「サイクル」122となつた。

8月初旬に鐘を取替え見積書の増額を交渉し、10月3日支払完了し、26日梵鐘委員会の解散式を挙行せり。

第1回試作品は八尾市恵光寺に売却し、第2回試作品は福井県小浜発心

寺（曹洞宗名剎寺）に売却された。

結果試作品の売却費を総計すれば赤字もなく、相当の宣伝をなしたことは大成功であつた。

本覚寺の鐘

福井県吉田郡下志比村東古市住職遼技波多野昭賢師は、松原社長の故郷寺であり、音楽家であり四天王寺雅亮会の一員で、檀家3千戸を有する福井県唯一の西本願寺派である。

性格も他に例を見ない特色ある方で、鐘再鑄にあたり、普通の鐘でなく異つた独特なものを作りたいが、他社では到底自己の満足するようなものは鑄造して貰えないから、特に社長の関係もあり、是非日立で願いたい話であつた。

5月16日再度来場され、青木、藤原博士に独特な構想を願いたい旨であつたので、この旨を両博士に依頼した。

6月5日両博士と波多野師と筆者で工芸大学に集まり、口径2尺7寸、170貫として構想を練り、乳のない撞座のみで盤抄調鐘でありたい旨、よつて両博士は納得された。

6月8日、雅楽の会員に盤抄調の可否を問い合せに来阪され、大阪駅で打ち合せをなして見送つた。

6月24日さらに工芸大学において、両博士、住職、筆者とさらに構想を練り、図面完成の上は送付を依頼された。

鐘面は古鐘のごとく粗雑の面を出して呉れとのことで、8月7日来阪され、8日藤原、波多野、曾田、筆者と奈良博物館の興福寺の鐘（国宝）を見学した。

先回青木博士より2尺7寸、170貫と言う話であつたが、藤原博士の図面によると2尺7寸5分になつていたので、200貫となる旨に付、波多野師に了解して貰いたいとのことで、筆者よりもお話するが、右博物館見学の折に御了解を願うべくお約束をしたが当日は欠席され、いささか波

多野氏も御不満であつた。と言うのは、前記の旨を既に総代等に発表した訳で、今更変更とは弱る旨で、藤原博士とも相談の結果予定より重い。重量は日立において実費で願つてはとのことで、両者調和策から、桜井部長に了解を得て、8月17日社長に部長と筆者で訪問し、前項の説明を申し上げ、社長も金4万円を寄贈され、日立も実費で調整すべく決定した。

9月1日鐘銘は六朝時代の本覚寺盤抄調鐘の木彫もできたので、持参方々、社長の意を先方に伝え、殊の外満足、敬意を表しておられた。

9月10日前後に鑄込式挙行を決定したが「ジエン」台風のため1ヵ月延期して、10月10日四天王寺の例にしたがい、楽人5名と各総代方14名来場され、盤抄調吹奏下に式典を初め、松原社長、岡本専務、赤松所長、桜居総務部長出席されて厳肅裡に挙行した。

11月2日総務部長に随伴して3日初鐘式に参列し青木、藤原博士も出席された。

この鐘こそ「二度びつくり」と言う異つた鐘で一面あつさりし、他面余韻嫋々たる鐘で評判の鐘となつた。

音響は南北山にはさまれ、東西は九頭流川に沿い西は2里余り、東は1里半の音響「テスト」報告があつた。

北陸新聞に、型破りの梵鐘、藤原博士畢生の作

今度繊維工芸大学教授藤原義一博士と同青木一郎博士によつて日立造船築港工場において奇妙な梵鐘の制作を完成した。それは藤原博士の思い切つた型破りの畢生の作であり、また日立造船としてもこれが最後の力作となるのではないかといわれているもので注文主は福井県の真宗本願寺派本覚寺の波多野昭賢師で、この鐘の変わったところは乳もなく樁もない。

1. 全体の形として音響上適當であることと正しい伝統を考慮し無意味の装飾を極力排し宗教的な美しさを表わした。
2. 乳と樁を除き正背両面に蓮華文形撞座を設け 卍字の荘嚴を付した。
3. 龍頭は蓮花とした。

などで、藤原博士は語る

わが国仏教のもつ純粋な要素と雰囲気を美術梵鐘として表現しようと試みたもので、若しこれが結果において意図を十分に満し得ないとするなら設計者の私の責任であるが、これが一つの動機となつて発意者の正して念願を真実に表現する作品の将来出現することを期待して止まない。

なおこの鐘は「サイクル」123の盤抄調である。初鐘式帰途、両博士と部長、筆者で国宝織田神社の鐘を見学した。詳細は梵鐘と古文化参照。

結

以上梵半鐘製鑄の概意を終るにあたり、現場各関係者の熱意と御厚意を謝し再び製鑄の拡充を計り、益々健闘あらんことを祈りて擱筆す。

口絵に現場直接関係者の写真を掲載す。

昭和26年7月2日記之

チエイ 山口 円 道

編者のことば

この本を書いた山口円道君は、昭和18年9月、日立造船に入社し、昭和26年6月に退社、この間終始築港工場に勤務した人である。

滋賀県坂田郡山東町字清滝の出身で、同町徳源院の住職である。明治42年8月生まれ。昭和11年3月、東京大正大学仏教学部を卒業後、浅草浅草寺研究生、滋賀県比叡山中学教諭などを経て昭和13年11月応召し日支事変に従軍し武漢三鎮にまで進撃し、16年5月無事凱旋帰還せるも、間もなく同11月再び応召し、大東亜戦争に従軍、フィリッピン~~戦~~定後18年7月再び目出度凱旋した。

この時父君の門弟であつた板坂藤伍君(当時築港造船所厚生課長担任、現在郷里広島県因島市田熊町対潮禅院現住)のすすめにより日立造船に入社、築港鶴町寮、寺田寮、西萩寮舎監に任ぜられ応徴士たちの訓育を担当した人である。

山口君が在社したのはちようど、日本の国がもつともきびしい試練にさらされた。終戦を境として前後8年間、前段は戦争に勝ち抜けば東に日本、西にドイツと世界を両分するという有頂天になつている時代。後段においてはそれが九天から直下、奈落の底に蹴おとされ、そのくら暗の穴の底で、もがきながら、この地獄からの出口を模索しておつた時代であつた。

築港工場(当時は築港造船所と称した)には幾千人もの徴用工、動員せられた学徒、玄海を渡つてきた朝鮮の青年、青い眼の敵国人等がおつた。勤労部勤労課長心得として勤務した山口君が、これらの人々との交渉が無かつたわけではない。

戦争が終つた直後、不良徴用工の烙印を押されて炭坑に送られた青年、何十年目かに祖国を回復した朝鮮の人々等が、警察力の未だおよばぬのに乗じて工場や寮に対して反覆激烈に行なわれた。お礼参りにくるものの処理応接にいとまもない明けくれを送らねばならぬ山口君であつた。

横浜で開かれたB級戦争犯罪裁判にも呼び出されたが、この方は幸い無罪を言い渡されてホットした。

こうした終戦直後のトラブルの中にまき込まれながらも何とかして日時は経過した。間もなく終戦の年を送り昭和21年の新年を迎えた。山口君1人だけでなく、その頃の工場幹部に岡村工務部長も伊達総務部長もみな鶴町寮での寮生活をしておつた。

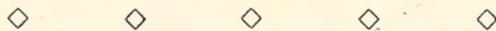
山口君は日々目撃し、また新聞ラジオで聞く敗戦国の地に墮ちた道義、これを何とか回復せねば、会社はつぶれる。いな日本国はつぶれると、ほんとうに深憂した。

戦争末期、国民精神総動員で応徴した山口君と同族の各宗の僧侶たち40数人も築港工場に来ておつた。

大阪府民生部長は市内各工場に配属せられていた、これらの僧侶たちを、四天王寺の講堂に集め、長い間の戦時中の労苦を感謝し今日の地におちた道義は、これから故郷へかえられる皆様宗教家の双肩にかかっているから、よろしく祖国復興に努力してほしい。と挨拶があつた。

山口君は席上次のような意見をのべた。

今日の未曾有の事態は、われわれ宗教家といえども、どうしてよいかわからぬ状態である。まずわれわれをこの際、再教育して、これに立ち向うようにしてほしい。と



私は本書を編するにあたって、本書を読まれる諸士に声を大にして申上げたい。

山口君は、何も日立造船を繁栄に導く重大な責任の地位におつた人ではない。そして、その時の四囲の環境も、終生をかけて会社に奉職せねばならない立場ではなかつた。一般の徴用僧侶たちのように、終戦とともに故山に帰えり父祖の寺院を護ればそれでよかつたのである。

山口君の寺は、東海道線柏原駅を下車すれば徒歩で15分か20分位、京

極源氏の菩提寺として、今日重要美術品に指定せられておる建物や宝篋印塔のある7百年の伝統のある、ゆいしよある寺院である。

しかるに何が同君をして梵鐘製鑄の情熱に傾けさせたか、本書の中にも彼自身が書いているように、身に泌みて感じた、道義廃退を、祇園精舎の悠久の、鐘の音によつて救おうとしたのであろうか。

技術は勿論、商売にかけても全然の素人である同君が、唯一の檀家である京極子爵家以外には、めつたに下げたことのない頭を、何回となく顧客に下げ、足をすりこぎにして全国の寺々へ鐘を売りに歩いたのであろうか。

私は会社に入つて来た人々が、その時間的の長短は問題ではなく、その業績が長く社史に飾られることこそ生き甲斐があるものではないかと、つくづくおもつたのである。

本書は、かねて岡村常務のしようようによつて、私がおの資料を調べかけたところ、築港工場に、山口円道君が書き残した「梵鐘製鑄史」のあることを知り、これを一読するは、実によくこまめにまとめてあつた。この内から梵鐘の歴史編と技術編を割愛し、正味、築港工場にその当時勤務していた人々が山口君等を中心に、どんなふう動いて、つりがねが商品として売り出されたかという部分のみを印刷に付することにした。

梵鐘製鑄に関係した人は勿論、数多く有るので、本書についての御意見などがあれば、編者の責任上、これをまとめて更に印刷に付したいと考えていることを付記して、あとがきのことばを終わる。

昭和38年5月15日

桑 原 秀 夫

付 録

拝復 貴院益々御清祥の段奉大賀候

陳者弊所梵鐘の件に就いて早速御照会に接し忝なく奉深謝候 弊所今般の梵半鐘
鑄造は下記趣旨並に要領に有之候間御高承の上何卒宜敷く御高配賜度 貴答
旁々御願ひ申上候 敬 具

記

1. 梵半鐘鑄造の主旨

工場製品一部転換により保有資材の一部を寺院復興に供し平和日本文化再
建設に資し度

尙資材等に於ては最優秀資材を提供古今研究の生料を蒐め担当技術者亦精
魂を凝らし近代の名鐘たる国宝的逸品を謹鑄致居候

2. 梵半鐘製作並に領布要領

(イ) 納 期 受注後2カ月弊日立「マーク」入りの責任鑄造品に候

(ロ) 価 格 完成目方(貫当り) 壹阡五百円

銘は御希望に応じ作製、各宗管長の揮毫も御斡旋可致候

凸字 壹字に付 50円 申受候

凹字 壹字に付 5円

(ハ) 輸送其他 御申込地点迄御輸送可致候 但し荷造運賃等は実費にて引
受申上候

追て御注文又は御問合せの向は下記総務部営業課宛御願ひ申上候

昭和 年 月 日

大阪市大正区船町15番地

日立造船株式会社築港工場

総 務 部 営 業 課

殿

梵半鐘規格表

区分	寸法		標準目方
	口径外侧	鐘身(肩迄)	
梵鐘	1尺8寸	2尺4寸	45貫
	" 9寸	2尺5寸5分	55 "
	2尺	2尺7寸	65 "
	2" 1寸	2尺8寸5分	75 "
	2" 2寸	3尺	85 "
	2" 3寸	3尺1寸	100 "
	2" 4寸	3尺1寸5分	120 "
	2" 5寸	3尺4寸	135 "
	2" 6寸	3尺5寸	150 "
	2" 7寸	3尺6寸5分	170 "
	2" 8寸	3尺8分	200 "
	3尺	4尺	250 "
	3" 2寸	4尺3分	300 "
	3" 5寸	4尺5寸	400 "
	半鐘	8寸	1尺5分
9寸		1尺1寸5分	5 "
1尺		1尺3寸	6 "
1尺1寸		1尺4寸5分	8 "
1" 2寸		1尺5寸5分	12 "
1" 3寸		1尺7寸	14 "
1" 4寸		1尺8寸5分	18 "
1" 5寸		1尺9寸5分	25 "
1" 6寸		2尺1寸	35 "

梵 鐘 の お 話

山 口 円 道

梵の字は清浄即ち汚れのない清らかなと言う意であり、梵鐘とは清浄な鐘を意味します。梵鐘は一名入鐘、殿鐘、堂鐘とも言い、大鐘は又鴻鐘、洪鐘、巨鐘、華鐘とも言われております。

唐の高宗乾封2年に書かれた祇園図経には祇園精舎の鐘のことが書かれてあります。釈尊が祇園精舎あるいは竹林精舎などで説法をされる時に、時を知らすために撞かれたり、あるいは説法に会座することのできない人々が、この清浄な音声を聞いて自ら各自の無明の煩惱を断除せんがために撞かれたものであります。

中国においては仏教渡来前にすでに楽器として鐘が用いられていたようであります。唐代に至つて、初めて今日見るが如き形態にまで発展し、その当時の鑄造にかかる山東省龍興寺の鐘が和鐘の起源となつたのであります。

日本においては奈良朝時代および平安朝時代より独特の様式をもつて発展し、時代の流れとともに様式も変化してきましたが、何と言つても奈良朝時代は仏教全盛時代であり、したがつて寺院の建築、仏像なども優秀なものが多く鐘においてもまた美事な作品が多いのであります。

ところが鐘と言えば千偏一律のもののように思われる人々が多いようですが、よく注意して見ると雲泥の差があることは建築や仏像と全く同じことであります。鐘の前に立てば自ら襟を正し頭のさがるものと反対に顔をそむけたくなるようなものもあり、音色も千差万別であります。

日本においては奈良朝、平安朝時代に鑄造されたもの40個、鎌倉、南北朝室町時代のもの440個で、徳川以後には無慮何萬個と鑄造されました。ところが昭和16年に始つた不詳事のために兵器に変わつたものが全国で約4万個もあり、供出を免れたものは国宝級のものあるいは新しくても著名なものだけで僅かに500個内外であります。

国宝級の鐘と言うのは、年代が古いとか音が良いとか言つて、国宝に指定されたものであります。

今日再鑄を志す方々は各年代の特徴を生かし近代的鑄造法の最も進歩した点を適応し、近代の名鐘としての国宝的逸品を鑄造しなければなりません。音声と言うものが電氣的に写真に撮られる時代であり、何時までも秘伝とか口伝とか非科学的な時代遅れのものであつてはなりません。

奈良朝時代に鑄造された京都妙心寺の国宝の鐘が黄鑄調の音響を出す良いものとしてつれづれ草の一篇に謳われ、人口に膾炙されておりますが、その音の振動数が1秒間に129と言う科学的解剖がなされ、あるいは各所の肉厚が場所々々に応じて測定されております。

鑄造においても電気炉によつて金属が溶解されるような著しい時代的進歩を遂げております。供出せしめられた梵鐘の材質を分析して見ますと、古書には、錫を1.3～1.7%と記載されてありますが、驚くなかれ1.0以下のものが多数にあり真に国宝的な梵鐘をしかも信仰的に製鑄されたものは僅かしか見ることができません。

以上簡単に梵鐘の概略を述べましたが、再鑄を志す方は信仰の対象物であることに留意され末代に生くる結晶としての鐘であるが故に科学者の意見を徴し、しかして再鑄にとりかかる義務があると信じます。喜んで寄捨される檀信徒の浄財を無下にも通り1遍の広告なり宣伝にまどわされて後世に恥をさらすような愚物を製鑄することは最も危険であります。

若し、梵鐘について御相談があれば何時にても愚見を御説明申し上げます。百年千年の後世に於いて、昭和年代の梵鐘が国宝級の鐘より勝れておるか、劣つておるか、検討される時代がかならずあると思われれますから、鑄造所を十分再検討されることを御推薦致します。

大阪市大正区船町15番地、日立築港造船所においては、戦時中僧侶動員を受けその方々の精神的御指導を衷心より感謝し、その感謝の念を表現するために造船工場が梵鐘を発願した次第です。

たまたま梵鐘考古学権威坪井良平氏は、当社前総務部長時代に「慶長末以前の梵鐘」の研究を発刊されましたが、その本にもとづいて供出、不供出の基準を定められたのであります。

(その他近著梵鐘と古文化) 梵鐘は何と言つても音響が生命でありますから、京都工芸学校教授青木一郎博士に科学的指導を仰ぎました。博士は「梵鐘の音響学」で学位論文をとられた方です。

彫刻家池田鵬旭氏等より梵鐘上における彫刻の指導を承り、さらに、音響および古典学の大家比叡山専修院教授中山玄雄師に梵鐘の音響と雅楽の律音について御指導を頂き、なお京都曼珠院門跡前大谷大学教授山口光円師に製作者の心構えについて御指導を頂いております。

以上の名士をしばしば招き研究を行ない、当社各技師に現存国宝の鐘を実地研究させ、かつ卓越せる機械電気装備と優秀な技術により精魂を凝して試作しました処、国宝的な立派な梵鐘の完成を見たのであります。

そこで製品の一部転換をなし保有資材の一部を寺院復興に供し、平和日本文化建設のために資材も最優秀品を提供して古今研究の生粋を蒐め、第1期計画としてすでに国宝級のもの300個を全国に送りました。

現在青木博士は「昭和革命の名鐘」として賞讃されている次第であります。

(おわり)

昭和18年	19	20	21	22	23	24	25	26
工場長	西牧 忠治	8/15 10	松本長蔵 1		岡本量平		赤松 茂	
副工場長	森 正道					長谷川銃三		
総務部長	森 正道		伊達良一 4		黒岩寅喜代		桜居繁親	
工務部長			岡村正家			(兼) 長谷川銃三 5	野間貫一 *	赤松 茂(兼)
庶務課長	高瀬 彰						安田良一	
営業課長							高瀬 彰	*
勤労課長	5 山口円道		勤労課長(労務課長) 芳 邨 勲				高塚敏雄	*
厚生課長	板坂 藤伍							
鑄造課長	岡村正家		小池 運				吉田 豊	
山口円道	9.17 舎監 5	勤労課長心得	6.1 勤労 課勤務		庶務課	営業課		6.15 退社
3月 日立名 造交船更 株式会社に		終 戦	寮生に道徳講義 梵鐘製作決定 第一回試作梵鐘完成			造船所を工場と改称		

日立製梵・半鐘納入寺院

府 県 別 住 所 一 覧 表

府県別	納入寺院	所 在 地	口 徑	重 量
滋 賀 (35)	東 雲 寺	東浅井郡朝日村川道	2尺8寸	200貫
	光 泉 寺	" 上草野村吉不規	2"6"	130"
	相 頓 寺	" 朝日村	2"8"	200"
	広 福 寺	" " 東尾上	2"6"	130"
	即 心 寺	" 田根村木尾	2"2"	85"
	明 願 寺	" 六郷村田附	2"6"	150"
	念 善 寺	" " 南浜	2"6"	130"
	西 護 寺	" 東草野村鍛冶屋	2"6"	130"
	光 福 寺	" 上草野村	2"8"	200"
	龍 沢 寺	坂田郡柏原町	2"6"	130"
	西 福 寺	" 近江長岡	2"6"	130"
	入 善 寺	" 大原村大字間田	2"6"	130"
	常 福 寺	" 柏原村 " 河田	2"6"	130"
	徳 源 院	" " " 清滝	2"6"	150"
	善 護 寺	" " " 大野木	2"6"	130"
	宝 池 院	" "	2"4"	120"
	真 楽 寺	" 杉沢	2"5"	135"
	悉 地 院	" 伊吹村上野	2"6"	140"
	誓 安 寺	蒲生郡朝日野村市子庄	2"7"	170"
	憶 念 寺	長浜市小浮町	2"6"	130"
	正 福 寺	" 相撲町	2"7"	170"
福 泉 寺	" 七条町	2"6"	130"	

府県別	納入寺院	所在地	口径	重量
	蓮 沢 寺	長浜市今住	2尺6寸	135貫
	本 福 寺	高島郡響庭村深溝	2尺2寸	85貫
	正 伝 寺	" " 旭	2尺6寸	130貫
	曹 沢 寺	" 今津町	2尺3寸	100貫
	延 命 寺	甲賀郡大原村神	2尺4寸	120貫
	浄 正 寺	" 甲南町市原	2尺6寸	130貫
	浄 福 寺	" 寺庄町	2尺6寸	130貫
	教 円 寺	愛知郡葉枝見村大字田附	2尺6寸	130貫
	薬 樹 院	滋賀郡坂本村	2尺4寸	120貫
	願 林 寺	栗太郡老上村大字野呂	2尺6寸	150貫
	西 円 寺	犬上郡多賀町字一円	2尺5寸	135貫
	円 照 寺	" 高宮町	3尺0寸	250貫
	浄 秀 寺	野州郡連野村開発	2尺8寸	200貫
奈 良	法 然 寺	磯城郡香久山村南浦	2尺6寸	130貫
(10)	九 品 寺	南葛城郡大正村槍原	1尺7寸	50貫
	龍 正 寺	" 吐田郷村名柄		貫
	正 念 寺	生駒郡片桐村西田中	2尺3寸	100貫
	西 光 寺	" " "	2尺5寸	135貫
	法 光 寺	宇陀郡宇陀村竜口	2尺6寸	130貫
	浄 土 寺	南葛城郡御所町外櫛羅	2尺6寸	150貫
	正 善 寺	吉野郡天川村字広瀬	2尺4寸	120貫
	玉 泉 院	" 賀名生村湯塩	2尺3寸	100貫
	法 林 寺	北葛城郡新庄町	2尺6寸	150貫
和歌山	蓮 専 寺	日高郡由良村大字里	2尺4寸	135貫
(13)	教 専 寺	有田郡広村仏弘山	2尺6寸	130貫

府県名	納入寺院	所在地	口径	重量
	最勝寺	有田郡湯浅町	2尺3寸	100貫
	西光寺	" 霊村寺庄	2尺6寸	150貫
	高松寺	西牟婁郡串本町	2尺6寸	130貫
	円光寺	和歌山市汐見町2丁目	2尺6寸	130貫
	宝蔵院	伊都郡富貴村大字東富貴	2尺4寸	120貫
	極楽寺	和歌山市雑賀町	2尺6寸	130貫
	泉養寺	西牟婁郡中芳養村	2尺8寸	200貫
	阿弥陀寺	伊都郡富貴村大字西富貴	2尺4寸	120貫
	慈誉寺	和歌山市寺町20	1尺1寸	11貫
	浄土寺	有田郡五西月村西ヶ峯	2尺4寸	120貫
	光永寺	和歌山市杭之瀬	2尺6寸	150貫
岐阜 阜 (12)	立源寺	不破郡長松村	2尺6寸	130貫
	妙応寺	" 今須村	3尺2寸	300貫
	法華寺	高山市	2尺5寸	135貫
	浄明寺	武儀郡関町小瀬		貫
	浄徳寺	揖斐郡八幡村市橋	2尺6寸	130貫
	長久寺	土岐郡駄知町	2尺6寸	130貫
	清安寺	土岐郡泉町西本町	2尺5寸	135貫
	禅徳寺	加茂郡伊深町	2尺6寸	130貫
	緑川寺	" 下麻生村	2尺2寸	85貫
	門前寺	養老郡牧田村	2尺3寸	100貫
	延命寺	羽島郡正木村南江山	2尺2寸	85貫
	善念寺	大垣市竹島町	2尺6寸	140貫
愛知 (7)	阿弥陀寺	西加茂郡三好村刈谷	2尺4寸	120貫
	平泉寺	知多郡阿久北村椋岡	2尺6寸	130貫

府県名	納入寺院	所在地	口径	重量
	高田寺	西春日井郡師勝村	2尺6寸	130貫
	教円寺	宝飯郡御津町御馬	2尺8寸	200貫
	日光寺	西春日井郡師勝二子	1尺8寸	55貫
	慶雲寺	渥美郡田原村	2尺6寸	130貫
	阿弥陀寺	愛知県幡豆郡佐久島村	2尺3寸	100貫
大阪 (14)	恵光寺	八尾市萱振町		
	遍照寺	泉南郡貝塚市馬市	2尺6寸	130貫
	常願寺	三島郡味生村別府	2尺4寸	120貫
	大念寺	" 安威村	2尺5寸	135貫
	称念寺	泉南郡西鳥取村字新	2尺6寸	130貫
	金乗寺	" 深日町	2尺6寸	130貫
	因光寺	摂津富田	2尺3寸	100貫
	西光寺	南河内郡田分町	2尺5寸	135貫
	常宣寺	旭区生江町23	2尺3寸	100貫
	四天王寺	天王寺区天王寺	2尺8寸	200貫
	宗円寺	北河内郡茨田町浜	2尺5寸	130貫
	本照寺	三島郡摂津富田	2尺8寸	244貫
	常見寺	高槻市東五百住	2尺6寸	150貫
	南桂寺	福島区海老江上3丁目	2尺6寸	160貫
三重 (4)	福寿寺	鈴鹿市国府町	2尺3寸	100貫
	浄福寺	" 石薬師町	2尺4寸	135貫
	息障寺	阿山郡王滝村植山	2尺8寸	200貫
	常福寺	名賀郡神戸村	2尺7寸	170貫
兵庫 (30)	西光寺	城崎郡奥佐津村下	2尺2寸	85貫
	観音寺	朝来郡竹田町竹田	2尺8寸	200貫

府県別	納入寺院	所在地	口 径	重 量
	如 来 寺	朝来郡中川村沢	2尺6寸	150貫
	安 楽 寺	養父郡八鹿町下網場	2尺8寸	200貫
	正 音 寺	" 大蔵村	2尺5寸	130貫
	西 教 寺	城崎郡豊岡町庄境	2尺6寸	130貫
	専 念 寺	" 中筋村土淵	2尺5寸	135貫
	高 蘭 寺	加古郡丹里町	2尺2寸	85貫
	菩 提 寺	有馬郡三輪町	2尺1寸	75貫
	蓮 淨 寺	姫路市飾磨区中島	2尺4寸	120貫
	松 林 寺	" " 阿成	2尺6寸	150貫
	長 久 寺	" 西今宿845	2尺6寸	130貫
	善 正 寺	" 玉手71	2尺6寸	130貫
	慈 山 寺	佐用郡佐用町	2尺1寸	75貫
	大 船 寺	" 石井村	2尺4寸	90貫
	淨 宗 寺	" 佐用町	2尺3寸	100貫
	一 行 寺	揖保郡揖保村今市	2尺7寸	170貫
	西 法 寺	" 神部村	2尺5寸	135貫
	徹 心 寺	神崎郡粟賀村福本	2尺5寸	135貫
	宝 勝 寺	出石郡神美村倉見	2尺1寸	75貫
	善 宗 寺	姫路市土山	2尺6寸	130貫
	徳 円 寺	" 広畑町	2尺6寸	130貫
	西 蓮 寺	" 飾磨区山崎	2尺4寸	120貫
	円 正 寺	" 西ノ庄	2尺4寸	120貫
	金剛城寺	神崎郡福崎町	2尺6寸	150貫
	西 徳 寺	姫路市飾磨区都倉町	2尺6寸	135貫
	如 意 輪 寺	飾磨郡曾佐村書写山	2尺6寸	135貫

府県名	納入寺院	所在地	口径	重量
	徳証寺	飾磨郡御着	2尺6寸	150貫
	福乗寺	" 餘部村打越	2尺6寸	130貫
	西蓮寺	印南郡志方町	2尺6寸	150貫
広島 (8)	西福寺	芦品郡常金丸村	2尺4寸	130貫
	徳円寺	" 広谷村鶉飼	2尺6寸	130貫
	吉祥寺	豊田郡瀬戸田町	2尺6寸	130貫
	薬師寺	" 東庄口村原	2尺3寸	100貫
	円立寺	山県郡大朝町	2尺2寸	100貫
	明正寺	双三郡林木村	2尺6寸	130貫
	敬覚寺	高田郡横田村	2尺6寸	150貫
	清光寺	豊田郡西野村大串	2尺4寸	120貫
岡山 (4)	普門寺	英田郡江見町	2尺2寸	85貫
	竜城院	浅口郡寄進島町	2尺4寸	130貫
	大光院	" 金光町	1尺8寸	45貫
	海蔵寺	" "	1尺8寸	55貫
愛媛 (11)	浄玄寺	温泉郡東中島村大浦	1尺8寸	65貫
	信行寺	" 河野村柳原	2尺0寸	90貫
	長善寺	" 東中島村	1尺8寸	65貫
	宅善寺	宇摩郡川之江町	2尺7寸	170貫
	定蓮寺	" 妻島村	2尺8寸	200貫
	教順寺	" 金田村	2尺2寸	85貫
	栄福寺	九和局区内鴨部村	2尺6寸	130貫
	極楽寺	越智郡瀬戸崎村	2尺3寸	100貫
	妙蓮寺	宇摩郡川之江町	2尺4寸	120貫
	光厳寺	" 金生村	2尺3寸	100貫

府県名	納入寺院	所在地	口径	重量
	五明院	宇摩郡金生村	2尺7寸	170貫
香川 (6)	薬王寺	三豊郡河内村	2尺6寸	150貫
	正蓮寺	綾歌郡加茂村	2尺6寸	170貫
	法専寺	綾歌郡山田村	2尺6寸	170貫
	浄願院	沖多摩郡四条村	2尺4寸	150貫
	清立寺	綾歌郡松山村神谷	2尺4寸	120貫
	宗林寺	三豊郡豊浜町	2尺6寸	150貫
徳島 (5)	安楽寺	美馬郡郷里町	3尺0寸	250貫
	願勝寺	" "	2尺6寸	150貫
	神宮寺	" 半田町	2尺6寸	150貫
	西福寺	" 一字村	2尺4寸	120貫
	地蔵寺	" 半田町	1尺8寸	45貫
富山 (1)	西蓮寺	射水郡小柳町		
埼玉 (1)	吉祥寺	大里郡中瀬村	2尺6寸	130貫
新潟 (4)	大昌寺	南蒲原郡加茂町	2尺6寸	130貫
	円蔵寺	中魚沼郡直入村上	2尺5寸	135貫
	広濟寺	刈羽郡高柳村	2尺4寸	120貫
	宝林寺	南魚沼郡中之島村舞子	2尺8寸	200貫
長野 (1)	法泉寺	埴科郡西条村	2尺6寸	150貫
石川 (8)	明園寺	羽咋郡相崎村敷波		
	長光寺	" 西浦村字赤崎	2尺6寸	150貫
	浄真寺	" 志賀浦村町	2尺6寸	150貫

府県名	納入寺院	所在地	口 径	重 量
	専 修 寺	羽咋郡越路野村千路	2尺6寸	150貫
	林 西 寺	能美郡白峯村桑島	2尺6寸	130貫
	真 浄 寺	鳳至郡穴水町	2尺3寸	100貫
	碧 流 寺	羽咋郡一宮村	2尺6寸	130貫
	浄 覚 寺	鹿島郡中之島村字浅波	2尺3寸	100貫
福 井 (8)	仏 護 寺	坂井郡藺村日方	2尺3寸	100貫
	願 念 寺	" " 石新方		貫
	専 念 寺	" 鷹巣村免島	2尺8寸	200貫
	光 善 寺	丹生郡宮崎村	2尺6寸	130貫
	金 剛 院	武生町	2尺6寸	150貫
	瑞 林 寺	三方郡北西郷村早瀬	3尺0寸	250貫
	発 心 寺	若狭小浜町	2尺8寸	200貫
	本 覚 寺	吉田郡下志比村東古市	2尺7寸	180貫
佐 賀 (2)	安 生 寺	三養基郡田代町	2尺4寸	120貫
	大 具 禪 寺	" 基山町	2尺0寸	90貫
大 分 (3)	覚 雲 寺	速見郡藤原村	2尺2寸	75貫
	法 照 寺	" 中山香町	2尺4寸	120貫
	仏 山 寺	" 由布院村	2尺3寸	100貫
長 崎 (1)	祇 園 寺	東彼杵郡崎針尾村	1尺9寸	55貫
宮 崎 (2)	願 蔵 寺	都城市前日町	3尺2寸	300貫
	歛 楽 寺	南那珂郡北郷村内之田	1尺4寸	20貫
福 岡 (1)	浄 円 寺	築上郡南田村松江	2尺8寸	200貫

府県名	納入寺院	所在地	口径	重量
山口 (3)	法積寺	阿武郡奈古町	2尺4寸	120貫
	安立寺	玖珂郡余田村	2尺2寸	95貫
	金剛寺	柳井町	2尺7寸	170貫
鳥取 (1)	西橋寺	入頭郡船岡町	2尺8寸	11貫
島根 (2)	光明寺	那賀郡国布村下府	1尺1寸	11貫
	常見寺		2尺3寸	100貫
栃木 (2)	常珍寺	芳賀郡水橋村	2尺6寸	150貫
	龍泉寺	足利市	2尺6寸	150貫
秋田 (1)	蒼龍寺	秋田市土崎港町	1尺3寸	14貫
熊本 (1)	円性寺	天草郡栖本村	2尺8寸	200

本書刊行につき下記の方々に大変お世話になりました。深く御礼申し上げます。

資料	築港工場	吉田部長，萩原，三木両課長，伊奈係長
装幀	本社 広報課	元道繁昭君
題字	" 秘書部	多田寿雄君
校正	" 文書課	亀谷 宏君
"	" "	浅野節子さん
印刷	" "	中西正和君

なお表紙画およびカットは岡山県倉敷市大原美術館に納入の梵鐘の模様にして，原画は，棟方志功氏の作

以上



